

[060_03/04] 経済学研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/4494296>

出版情報：経済学研究. 60 (3/4), 1994-12-10. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：

序 鈴木教授と宮川教授の還暦を祝う

この論文集は鈴木啓介教授と宮川謙三教授との還暦をお祝いして、九州大学経済学部での同僚の他に、お二人と専門上のお付き合いが特に深かった学外の方々にも寄稿をお願いして、刊行される。これを機会に経済学会を代表して、お祝いの言葉を申し述べるとともに、私が知る限りでのお二人の人物と学問を紹介したい。

鈴木さんは東京外国語大学ロシア語学科を卒業、しばらく新聞記者をなさった後に、日商岩井に入って長くモスクワに駐在され、お得意のロシア語を駆使して仕事をされた。ソ連東欧貿易会の調査課長になられた頃から、ロシア・ソ連問題の研究者としての側面を強めていかれたのだろう。モスクワや東京での何度もの国際交渉に参加されながら、その論文や著作に見られるように、様々な経験を生かした専門家として知られていったに違いない。鈴木さんが教授の生活に入られたのはかなり遅く、6年前に静岡県立大学であった。そして一昨年の4月には私どもの要請を入れて、九州大学経済学部へ赴任されたのである。ここ数年来私どもの学部では、研究の幅を広げ、実社会との交際を開き、様々な国との交流を広げるよう努めているが、そうした動きの中で鈴木さんをお迎えできたことは、幸せであった。鈴木さんと同じ学部で暮らした期間は短いですが、私には以前からの共通の友人もあって、ごくこのごろの知り合いとは思えない。言葉の歯切れの良さにはうっとりときさせられるものがあり、現在の大学世界への批判を口にされる鈴木さんは、さっそうとしておられる。同時に、若者にご自分の学んでこられたところをなるべくよく伝えようとする情熱が、常に感じられるお人柄である。

宮川さんは、1957年に九州大学経済学部へ入学されて以来、佐賀大学に10年間勤務された期間を除けば、ずっと九大で過ごされた。九州大学経済学部の誇る学問の分野に農業経済学があり、田中定先生に始まる佐賀農村生産力段階の実証などで、非常に高い評価を得てきた。宮川さんはまさにそれを受け継いで出発され、初期の論文には地代論に関するものが多い。農業経済学者としての地歩を固められた後、さらに見方を広げて経済生活の様々な分野を対象とされた。宮川さんの業績目録の中では調査報告という項目が設けられているが、そうした仕事を通じて、地域の経済生活を見つめてそこから問題を考えるという、宮川さんの学風が涵養されていったに違いない。そうした資質から宮川さんは国土審議会のような全国レベルでの活動にも、関わるようになっていかれたのである。私は宮川さんとはすでに長い付き合いとなったが、常に先を見通した上で的確な判断を下しておられるので、何か問題があると、「宮川さんならどう考えるか」という風にして、自分の考えを正していったことも多い。丁度評議員をなさっていたときに、当時の学部長が倒れられ、宮川さんは学部長代理を数カ月にわたって勤められた。その後で学部長にも選ばれ、折から大学をとりまく状況が急変しつつある中で、大変苦労されたのであった。

鈴木さんと宮川さんとはこんな風に、経歴も人柄もかなり違ったお二人である。われわれの学部で還暦を迎えられたことが、鈴木さんにとって幸せであったと願わずにはいられないし、宮川さんも長く住み慣れた学部で、心豊かに記念となる年を迎えられたと信じている。九州大学経済学部が大学改革のうねりの中で力強く進んでいかなければならないだけに、お二人がなお一層活躍して下さることを期待してやまない。

1994年6月

九州大学経済学会長

森本芳樹